様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６３５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０６３４

研究課題名（和文）中国の英語教育に関する調査研究に基づく日本の大学英語教育再構築の試み

研究課題名（英文）A Study on the Reconstruction of English Education at Universities in Japan Based on Investigation and Research of English Education in China

研究代表者
西蔭　浩子（NISHIKAGE, Hiroko）

大正大学・表現学部・教授

研究者番号：００２９７０７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　日本の大学英語教育の再構築を目指し、中国の小学校から大学までの英語教科書の分析、北京市の小学校・高等学校・大学での英語授業観察、その上で現地教員への聞き取り調査を実施した。
　中国における小学校からの一貫性のあるカリキュラム構成、明確な達成目標、アクティブ・ラーニング形式の授業の実態を明らかにした。3年間の成果を発表するため、北京師範大学の研究者2名を迎えてシンポジウムで報告し、合わせて報告書としてまとめた。

研究成果の概要（英文）：In order to reconstruct English education at universities in Japan, we researched the textbooks used at elementary, junior high school, high school and university in China, observed classes and did an oral survey.
 We analyzed the English education curriculum in China, examined their aim of educaton and their active learning style teaching methodology. We invited two researchers from Beijing Normal University to accnounce and discuss our results by holding a symposium. A research report has been published.

研究分野：人文学

キーワード：教授法　カリキュラム論　英語　日中　文化的差異

１．研究開始当初の背景

(1)「英語を使える日本人」育成のため、日本国内で様々な手段が講じられ、2013 年度には小学校英語の教科化が決定、また大学入試のあり方も大きく変化する様相を見せていた。近隣アジア諸国でも英語コミュニケーション能力の養成は重要課題であり、中でも中国、韓国の英語熱は高く、日本の先を行く成果を上げている。

(2)中国の英語教育については、小池(2004～2007、基盤研究(A))の日・中・韓・台の比較調査があり、小学校からの英語一貫教育を視野に入れた改革への牽引力になった。また、唯一中国では大学生対象の英語実力試験が実施され、教授法も最新のものと伝統的教授法が併せて取られ、学習者の能力積み上げに貢献していると分析されている。

(3)大学英語教育においても、中国では①Can-do 方式のカリキュラムに従い②英語実力試験を充実させ③最新の知見と伝統的教授法を合わせた授業展開により教育効果を上げている。一方、日本では大学入試までは大きな改革が進行しているが、大学での英語教育は各大学に任されている感が強い。

２．研究の目的

中国の英語教育の日本の大学英語教育への応用、援用の可能性を検討し、以下 4 点の実現を目的とする。

(1)中国の大学での Can-do リストの活用法を分析し、日本の大学英語教育へ活用できる評価法について提案する。

(2)中国の大学生対象英語統一テスト(CET, TEM, CELT, PETS 等)を分析し、日本の大学生向けの同種のテストの開発、遅くても開発の準備を行う。

(3)中国の大学英語教育現場の見学等を通し、授業実践において日本の大学英語教育に応用できる点を見出す。

(4)英語習得に対する意識の根底に根ざす日中の文化的差異を考慮したうえで日本の英語教育再構築のための提言を行う。

３．研究の方法

(1)中国の小学校から大学までの一貫教育の流れを把握するために、英語課程基準（学習指導要領）と使用されている教科書を分析する。その際、教科書は北京市で最も使用されているものを用いる。

(2)中国の大学英語教育についての次の３項目①統一カリキュラムの具体的内容②Can-do 方式のリストの内容と活用、評価法③全国の大学で実施される英語統一テストの具体的内容を分析する。

(3)中国の英語授業で用いられている教育法を現地の授業視察と英語教員に対するインタビューによって把握する。視察先は北京市内とし、2 回の視察を実行する。第 1 回は実際の授業視察の前段階として英語教育に関わる研究者との打ち合わせと日本では入手困難な中国の教科書および英語統一テストの入手をし、第２回を実際の授業視察とする。

(4)代表者等がこれまで行ってきた日中の文化的差異に関する研究の蓄積を援用し、上記３項目の有機的な関連を検討する。

４．研究成果

(1)北京市内の小・中・高校で使用されている教科書分析の結果、以下の特徴を確認した。①初等学校教育では英語の基礎力を身に付け、欧米文化を学びながら、中国文化に気付き始める。②中等学校に入り、中国文化と欧米文化の差異を認識し、3 年には中国文化を発信すると同時に欧米文化との融合を図ることができるように、緩やかな流れが作られている。③リーディング教材が中国文化と欧米文化のバランスを保っている。以上を日本の教科書と比較すると、日本の方が日本文化や日本の生活を意識した構成になっていた。

(2)英語統一テストのうち、CET(College English Test) 4 級と 6 級、TEM(Test for English Majors)4 級と 8 級の特徴の検討から、学生に求められる英語力を特定した。両テストに共通している特徴から導き出された中国の大学生に求められている英語力は①英語によるアーギュメント力、②短時間に大量の英文を読み取るスキミング力とスキャニング力、③正確に英語を書けるスペリング力が挙げられる。さらに英語専攻者には④高いレベルの語彙力、⑤詳細な情報を聴き取る力、⑥正確な読解力、⑦実用性の高い英文作成力、⑧詳しい英文法の知識が加わる。

(3)北京市内の授業視察からは以下の項目が確認された。①小学校段階から英語（特にすべてリーディング指導）では一貫して、英文読解のストラテジーを構築するための指導がなされている。②教師も生徒・学生も中国語は全く使用せず、英語のみによる授業展開である。③生徒・学生全員が授業に大変能動的に参加している。④口頭でのやり取りが頻繁に行われている。⑤パワーポイントを必ず用いたスピーディーな展開の進行である。⑥同じ教科の教員同士で定期的に授業運営方法の話し合いをし、互いの授業見学を頻繁に行っている。

(4)日中の文化的差異を踏まえ、中国の研究協力者宛金章教授（北京師範大学・日本語教育）と馬欣教授（北京師範大学・英語教育）

とのディスカッションを重ね、シンポジウムを持つことで、以下のことが共通認識となった。①1992 年、2000 年に続き、2017 年に予定されている中国の教育省によるカリキュラム変更により、21 世紀への鍵となる能力（キー・コンピテンス）として、言語能力、学習能力、文化的な気づきと思考力が英語教育でも強調されていること、②その結果、単に英語を練習することにとどまらず、学習過程において生徒の思考力を高めることが英語教育の意味になったこと、③教師中心の授業から、より学習者中心のアプローチへと変わっていること、④中国の学生には日本人にない言語学習に対するモチベーションが３つあることである。モチベーションについては、一つは海外志向が高く留学熱があることであり、次に貧困から脱出するための手段になっていること、そして自分の好きな外国の文化があり、それがモチベーションになっているという文化的なモチベーションを持つ人が多いということである。また、⑤国際的な視点でものごとを見る力、ステレオタイプにならない独自性、学習している言語を用いて国際貢献につなげる視野を育てることが両国ともに今後の外国語教育に必要とされている。外国語の授業では文化的な気づきや思考能力が重要な要素になっている。

(5)本研究の目的として挙げた日本の大学生向けの英語試験の開発および具体的な大学英語教育再構築のための提言へ至ることはなかったが、英語試験開発へ向けての示唆と日中の文化的差異を考慮したうえでの提言へ向けての判断材料は得たことから、今後それらを精査し、日本において実現可能な試験の開発と大学英語教育再構築の仕組みづくりに取り組んでいく基盤を作った。

(6)当初英語教育のみに視点をおいて始めた研究であるが、中国における日本語教育を対照することで、日本における中国語教育および日本における外国語としての日本語教育へ研究対象の進展が図られた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１４件）


① 岡野恵、中国の英語教育における到達目標と学習ストラテジーの育成―英語統一試験と英語課程基準の果たす役割―、大正大学研究紀要、査読無、102 巻、2017、pp.246-262
② 中島紀子、日本人大学生の日本語聴解力に関する調査研究―オーセンティック教材聞き取りの誤用分析―、大正大学表現学部表現学、査読無、3 巻、2017、pp.1-16
③ 平石淑子、東京から―蕭紅書簡（上）：翻訳と注釈、日本女子大学文学部紀要、査読無、66 巻、2017、pp.75-101
④ 岡野恵、中高英語授業に対応する ICT 活用指導力育成の必要性―教育実習生のインタビューから―、大正大学表現学部表現学、査読無、2 巻、2016、pp.11-19
⑤ 西蔭浩子・岡野恵・平石淑子、中国の英語教育がめざすもの―小・中等英語教科書に見える中国文化、大正大学研究紀要、査読無、101 巻、2016、pp.267-276
⑥ 平石淑子、蕭紅 ： 魯迅先生の思い出(下)―翻訳と注釈、日本女子大学文学部紀要、査読無、65 巻、2016、pp.117-135
⑦ 平石淑子、明治初年の土佐における近代教育と民権運動―ある青年の事例から、史艸、査読無、57 巻、2016、pp.1-23
⑧ 平石淑子、大連阿片事件と「神々の乱心」、第 16 回松本清張研究奨励事業研究報告（松本清張記念館）、査読無、16 巻、2016、pp.3-37
⑨ 岡野恵、大学教養英語における映画英語の可能性、大正大学表現学部表現学、査読無、1 巻、2015、pp.10-19
⑩ 平石淑子、蕭紅 ： 魯迅先生の思い出(上)―翻訳と注釈、日本女子大学文学部紀要、査読無、64 巻、2015、pp.123-144
⑪ 平石淑子、20 世紀初頭中国東北地区における文芸状況について―『盛京時報』を中心に、お茶の水女子大学中国文学会報、査読有、34 巻、2015、pp.1-18
⑫ 平石淑子、専訪蕭紅研究専家平石淑子“她是能屹立世界之林的作家之― ”外灘画報、査読無、611 巻、2015、pp.38-41
⑬ 櫻井千佳子・岡野恵、The Role and Results of Motivating Students to Autonomous Learning in “ Environmental English Courses ”、The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要、査読無、5 巻、2015、pp.47-63
⑭ 平石淑子、『満州日日新聞』の記事に見る関東州法院―1908 年上半期について、総合社会科学研究、査読有、3-6 巻、2014、pp.21-33


〔学会発表〕（計５件）


① 平石淑子、蕭紅・蕭軍の青島での創作活動、文化都市青島における知識人ネットワークと年表象の研究（招待講演）、2016 年 6 月 18 日、神奈川大学（神奈川県・横浜市）
② 平石淑子、「神々の乱心」と大連阿片事件、松本清張研究会、2015 年 12 月 5 日、東京学芸大学（東京都・小金井市）
③ 西蔭浩子・岡野恵・平石淑子、中国の英語教育がめざすもの―初等・中等英語教科書に見える中国文化、第 9 回大学英語教育学会関東支部大会、2015 年 7 月 12 日、青山学院大学（東京都・渋谷区）
④ 平石淑子、蕭紅の作品世界、湖北省民族大学（招待講演）、2014 年 11 月 20 日、

湖北省民族大学（武漢市、中華人民共和国）

⑤ 平石淑子、蕭紅に対する評価をめぐって、湖北大学（招待講演）、2014 年 11 月 19 日、湖北大学（武漢市、中華人民共和国）

〔図書〕（計３件）

①西蔭浩子・荻野谷悦子、アスク出版、Real English トラベル編、2016、109

②西蔭浩子・荻野谷悦子、アスク出版、Real English 国内編、2016、109

③平石淑子、勉誠出版、中国現代散文傑作選 1920-1940、2016、447

６．研究組織

(1)研究代表者

西蔭　浩子（NISHIKAGE, Hiroko）
大正大学表現学部・教授
研究者番号：00297079

(2)研究分担者

岡野　恵（OKANO, Megumi）
大正大学表現学部・教授
研究者番号： 50587318

平石　淑子（HIRAISHI, Yoshiko）
日本女子大学文学部・教授
研究者番号：90307132

孔令敬（KOU, Reikei）
日本女子大学文学部・非常勤講師
研究者番号：30449110

中島紀子（NAKAJIMA, Noriko）
大正大学表現学部・助教
研究者番号：20782072